様式Ｃ-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 21 年 5 月 29 日現在

研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８３１００２７
研究課題名（和文）　生物多様性保全と自然再生の理念に関する環境倫理学的研究

研究課題名（英文）　Studies on environmental ethics towards the ideas of conservation of biodiversity and nature regeneration

研究代表者
鬼頭　秀一（KITOH SHUICHI）
東京大学・大学院新領域創成科学研究科・教授
研究者番号：４０１６９８９２

研究成果の概要：生物多様性保全と自然再生の理念は、地域社会の文化や社会のあり方と密接に結びついており、そのようなものを統合した「地域再生」の理念と深い関係がある。そのため、自然と社会や文化の入れ子状態の中で、「サステイナビリティ」などの自然にかかわる理念も社会や文化の理念から再定義されなければならない。そのようなことを実践的に可能にするための人材育成のあり方を実践的に提示するとともに、生物多様性保全や自然再生が、治水や災害などの問題も含めた包括的な環境や社会のあり方、さらには、エネルギーや脱炭素化社会の構築にも展開できる社会的な論理を提示した。『環境倫理学』（東京大学出版会）を出版してその成果の内容を提示した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	3,900,000	1,170,000	5,070,000
2007 年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
2008 年度	3,800,000	1,140,000	4,940,000
総　計	11,500,000	3,450,000	14,950,000

研究分野：環境倫理学
科研費の分科・細目：環境学・環境影響評価・環境政策／哲学・倫理学
キーワード：環境理念・環境倫理・生物多様性保全・自然再生・脱炭素化社会・理論と実践

１．研究開始当初の背景

1992 年リオデジャネイロの地球サミットで、生物多様性条約が締結され、国際的にも生物多様性の必要性とその実現が課題となっている。国内的には生物多様性国家戦略が策定されており、2003 年に改定され、新生物多様性国家戦略としてその指針を定めている。その改定の内容にも見られるように、従来のように、生物多様性の破壊の原因を人間の自然に対するインパクトとして捉えて、人間の介入を排除した形でその保全を捉え、一方で、人間の持続可能な発展をはかるという形ではなく、里山の自然のように、人間の適度な介入、攪乱の必要性も必要とされ、外来種に起因する生物多様性のように、人間の積極的な介入により生物多様性を保全することも必要になってきている。また、「自然再生」という人間が積極的に介入することも保全の手法として捉えられ、2003 年からは自然再生事業が大きな国家プロジェクトとしてスタートしている。（研究が始まってからは 2007 年に国家戦略の改訂が行われ、第三次生

物多様性国家戦略が発表され、2010 年に名古屋で開催される生物多様性条約第 10 回締結国会議に向けて、SATOYAMA イニシアティブも提起されており、本研究の課題の重要性がますます認識されている。）

このように、生物多様性の保全や自然再生が大きくクローズアップされ、「自然再生」という手法に関しても、人間が積極的に自然に介入しかかわりあうことが重視されてきたにも関わらず、人間の自然を捉える「価値」の問題や、「管理」の「理念」という介入の仕方、かかわりあいの仕方に関しては明確で多くの人々や専門家が合意できる基準がない。今まで以上に、人間の側の論理が重視されなければならなくなったにもかかわらず、人文社会科学の領域では、それを十分に扱う準備ができていないのが現状である。特に、新生物多様性国家戦略で「文化」ということが明記されるようになったものの、自然にかかわる、またかかわりあうようなさまざまな地域の文化に関して十分な研究の蓄積があるわけでもなく、それがどのように保全や再生の理念にかかわるのかに関して、十分な方針が確立されていないのである。つまり、生物多様性の保全、自然再生に関して、どのような自然を保全すべきか、どのような自然を再生するべきかという、理念にかかわる問題は、生態学などの自然科学と環境倫理学、環境社会学、環境史などの人文社会科学の境界的な領域で、その領域の研究者の協働的な研究が必要になってきているが、十分に展開されず、理念の問題も検討されないままになっている。

再生すべき自然に関しては、従来は、生態学によって、特に、近年では、保全生態学が自然科学の立場からその像を描いている。その中で、生態系を内部的に不均一で多様な部分を内包した変動の大きい系として捉えており、保全や再生の手法として、順応的管理という手法が提案されるに至っている。

しかし、人文社会科学の議論の中では、生態系の概念自体が、いまだに、かつての有機体論的で平衡点を前提とした安定した調和的なものに留まっており、内部的に不均一で多様な部分を内包した変動の大きい系として捉えるような、自然科学の状況がうまく捉えきれていない。自然科学だけでは十分に扱えない「価値」の問題を、環境倫理学をはじめとした人文社会科学が引き受けなければならない状況が出現しているにもかかわらず、自然科学と人文社会科学との共通の基盤となる知識のレベルでも十分に了解が取れていないのが現状である。

２．研究の目的

外来種の問題も含めて生物多様性保全や自然再生にかかわる事業が本格的に推進されている中で、いかなる自然を守り再生するのかという生物多様性保全や自然再生の政策の根本的な理念を構築することを最終的な目標にしている。そのために、自然科学と人文社会科学とのこの問題に関する共通了解を深めるための基本的な理論的基盤を整備し、その「理念」や「価値」を中心に担う環境倫理学の理論的整備を押し進め、生物多様性や自然再生にかかわる「理念」の問題に関する研究を総合化、統合化することを目的に設定する。その目的のためには、机上で抽象的な議論をするだけでなく、生物多様性保全や自然再生の現場にたって、具体的な問題の学際的な実証研究を進めるとともに、多様な研究領域の研究者がお互いの理論的な問題を交差させることにより、生物多様性の保全や自然再生の普遍的な「理念」を検討し構築することを目的としている。

３．研究の方法

二つの方向性で研究を展開した。

（１）重点の研究のフィールドにおける自然科学との融合を意識した人文社会科学的なインテンシブな調査

理論的研究と実証的な研究が有機的に結びつけられるように、いくつかの実証研究を展開した。①自然再生事業（釧路湿原、霞ヶ浦、アザメの瀬、埼玉県くぬぎ山等）、②兵庫県豊岡や新潟県佐渡におけるコウノトリやトキの野生復帰事業、③いわゆる獣害問題を中心とした野生動物との関係（青森県脇野沢、屋久島等）、④野生生物をアイコンにした地域振興を展開している場所（長野県佐久の鯉、宮崎県綾町の照葉樹林、長野県志賀高原の湿生植物等々）。これは、生物多様性保全、自然再生ということを考えたとき、相互に関連した異なる四種類の領域であるが、「いかなる自然を保全、再生するのか」という生物多様性保全の理念に深くかかわり、また、いずれも、人の営み、生活、遊び、遊び仕事、生業、産業などに密接に関わり合っている。「理念」を構成する重要な領域であり、また、人文社会科学と自然科学との境界領域にもかかわっている。自然科学の蓄積があるフィールドに関しては、人文社会科学者の調査に自然科学の研究成果を交差することによって、問題を明らかにし、自然科学の蓄積がまだ十分でない領域に関しては、両方の調査を、両方の研究の連絡を取りながら行った。

（２）フィールドの現地での研究会と現地検証

重点の研究フィールドを意識しつつ、比較的研究の蓄積があるところを選定して、そこでの現地研究会を開催した。初年度においては、長野県志賀高原と、兵庫県豊岡、2 年目は、長野県佐久の鯉をアイコンにした地域振興と淀川の治水と環境保全を一体とした形で捉えるために京都で、最終年度は、エネルギーの地産地消（*EIMY*）を実践している福島県天栄村湯本地区で行った。

初年度は、湿生植物の再生と地域の再生をともに組み合わせている志賀高原や、広義の自然再生事業でもっとも成功している豊岡のコウノトリの野生復帰事業で、人文社会科学と自然科学の課題の接点とそこにおける理念のあり方について考えてきたが、２年目は、研究分担者の佐藤哲が提起しようとしている、野生生物等をアイコンとして捉える考え方を検証するために佐久で議論をしたり、治水と環境、景観などを一体として捉えようとする包括的ウェルネスという概念を提唱しようとしている桑子敏雄の議論を検証し、政策的課題を含めて議論するため、淀川水系流域委員会の現場で行った。最終年度は、エネルギー問題を取り上げ、地域における生物多様性保全、自然再生と、エネルギーの地産地消を可能にする、あり方を検討し、生物多様性保全や自然再生などを地域再生にしていくためにもエネルギー問題をそこに位置づける可能性について検討した。

４．研究成果

以下の３点にまとめられる。

（１）自然に関する保全、再生等の論理と人間の社会や文化の保全、再生の論理は深い関係にあり、一体のものとして考えなければならない。そのため、自然に関する保全や再生の論理や理念は、人間の社会、文化によって再定義されなければならない。

このことに関しては、研究メンバーを中心に、『環境倫理学』の書籍を編纂して、世に問うこととなった。目次等は下記に示す。

（２）自然と社会の両方の論理を橋渡しするのは、その両方に精通している専門家がかかわる必要性があり、その種の専門家のあり方、養成の仕方について明確に提示した。さらに、具体的な人材育成という形で提示した。博士課程学生やポスドクの研究協力者たちは、その種の専門家として、下記に示すような研究成果を生み出している。

（３）生物多様性の保全や再生の問題は、単に自然の保全や再生にかかわるだけでなく、地域再生として示され、さらに、治水や災害などの自然のリスクにかかわる問題やそれに関する地域の主体形成の問題にも関係している。さらに、エネルギーの問題、地球温暖化対策、脱炭素化社会の形成の問題などにもかかわっており、そのための社会の理念を提示することとにも関係している。これに関しても、『環境倫理学』の中で、具体的な形で示して世に問うこととなった。

以上、三つの問題に関連して、研究プロジェクトの中で、さまざまな新しい概念、概念的枠組み、主張などがなされている。「re-generation としての自然再生」「サステイナビリティの再定義」「環境アイコン」「包括的ウェルネス」「恵も禍も全体として捉える環境倫理」等々。

それらを集大成するようなものとして、『環境倫理学』を東京大学出版会から出版することとなった。１０月に刊行するべく、現在印刷中である。その目次案について、下記に掲げる。

鬼頭秀一・福永真弓（編）『環境倫理学』東京大学出版会、2009 年 10 月刊行予定。

序章　環境倫理の現在――二項対立を超えて（鬼頭秀一）

Ⅰ.「環境倫理が語れること」

第１章　自然・保護――「自然を守る」とは何を守ることか（森岡正博）

第２章　公害・正義――「環境」から切り捨てられたもの／者（丸山徳次）

第３章　生命・殺餐――肉食の倫理、菜食の論理（白水士郎）

第４章　自然・人工――都市と人工物の倫理（吉永明弘）

第５章　社会・未来――世代間倫理の行方（蔵田伸雄）

第６章　精神・豊福――生きものと人が共にはぐくむ「豊かさ」（福永真弓）

Ⅱ.「環境倫理のまなざしと現場」

第７章　「持続可能性」を問う――「持続可能な」野生動物保護管理の政治と倫理（安田）

第８章　「文化の対立」を問う――捕鯨問題の「二項対立」をこえて（佐久間淳子）

コラム　「野生の復帰」を問う――野生復帰において人はどこまで可能か（池田啓）

第９章　「自然の再生」を問う――自然の「保護」と「再生」の政治性（瀬戸口明久）

第 10 章　「外来種駆除」を問う――政策からこぼれおちる「ローカル知」（二宮咲子）

第 11 章　「浪費的保護」を問う――自然エネルギーと自然「保護」の隘路（丸山康司）

Ⅲ.「環境倫理から生まれる政策」
第 12 章　家庭から政治へ――地球温暖化対策から透かしてみる持続可能な社会（井上有一）
第 13 章　知識から知恵へ――土着的知識と科学的知識をつなぐレジデント型研究機関（佐藤哲）
第 14 章　政策から政（まつりごと）へ――熟議型市民政治とローカルな共的管理の同床異夢（富田涼都）
第 15 章　リスクから予防へ――リスクマネジメントと予防原則をめぐって（松田裕之）
第 16 章　分断から連帯へ――包括的ウェルネスの思想（桑子敏雄）
終章　恵みも禍いも――豊かに生きるための環境倫理（鬼頭秀一）　　以上。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者、研究協力者には下線）

〔雑誌論文〕（計３０件）
以下すべて査読有。

１．井上有一「動物の解放論とは何か ― 論理と心情をめぐる考察 ―」『シンガーの実践倫理を読み解く』昭和堂、2009 年、83 -111。

２．丸山康司「「野生動物」との共存を考える」『環境社会学研究』14 巻 2008 年、5 -20。

３．桑子敏雄「トキを語る移動談義所の試み－風土の中の生き物」『生き物文化誌 BIOSTORY』10 巻 2008 年 18 -23。

４．豊田光世，山田潤史，桑子敏雄「佐渡めぐり移動談義所」によるトキとの共生に向けた社会環境整備の推進に関する研究」『自然環境復元研究』4 巻、2008 年 51 -60。

５．Sato, T., Makimoto, N., Mwafulirwa, D. & Mizoiri,S. Unforced control of fishing activities as a result of coexistence with underwater protected areas in Lake Malawi National Park, East Africa, Tropics, 17(2008)、 335 -342.

６．佐藤哲「環境アイコンとしての野生生物と地域社会－アイコン化のプロセスと生態系サービスに関する科学の役割」『環境社会学研究』14 巻、2008 年 70 -85。

７．佐藤哲「地域環境をめぐる科学と社会 -- 外来の知識と土着的知識体系のかかわり」)『環境－実践の現場から』東信堂、2008 年 159 -184。

８．菊地直樹・池田　啓「コウノトリの野生復帰プロジェクトと地域づくり」『ランドスケープ研究』72　　巻 、 2008　年 368 -372。

９．森岡正博「　生命人文学の提唱：情報学的に展開する研究領域として」『生命倫理』18 巻、2008 年 83 -89。

１０．森岡正博,吉本陵「将来世代を産出する義務はあるか？：生命の哲学の構築に向けて」『人間科学：大阪府立大学紀要』4 巻、2008 年 57 -106。

１１．福永真弓，2008,「環境倫理を現場から切り開く――正統化と規範生成のダイナミズム――」松永澄夫編，『環境――文化と政策』，東信堂.

１２．富田涼都「順応的管理の課題と「問題」のフレーミング－霞ヶ浦の自然再生事業を事例として－」『科学技術社会論研究』5 巻、2008 年。

１３．鬼頭秀一「水俣と抵抗の原理としての環境倫理」『水俣五〇年－ひろがる「水俣」の思い』（作品社）2007 年、131 -146 頁。

１４．森岡正博「生命学とは何か」『現代文明学研究』８巻、2007 年 447 -486。

１５．丸山康司「市民参加型調査からの問いかけ」『環境社会学研究』１３巻、2007 年 7 -18。

１６．丸山康司「人間 -自然系としての環境」『科学』７７巻、2007 年 841 -844。

１７．丸山徳次「「鏡」としての水俣病－水俣病の／と現在」『水俣五〇年－ひろがる「水俣」の思い』（作品社）2007 年 70 -94。

１８．Matsuda H　Why Is the Diversity of Biological Resources Needed?、Farming Japan、2007、28 -33。

１９．小谷浩示・柿中真・松田裕之「不確実性下の外来種管理」『三田学会誌』100 巻、2007 年 747 -771。

２０．松田裕之・西川伸吾「自然再生事業における十の助言と八つの戒め」『日 本ベントス学会誌』６２巻、２００７年 93-97。

２１．吉永明弘「人間主義地理学は環境論にいかに寄与しうるか」『公共研究』４、2007, 9-36。

２２．吉永明弘「環境倫理学の今後の展開に関する一提案」『環境思想教育研究』１、2007、57-64。

２３．福永真弓, 2007,「鮭の記憶の語りから生まれる言説空間と正統性――米国カリフォルニア州マトール川流域を事例に――」,『社会学評論』58(2): 134-51.

２４．福永真弓, 2007,「正統性の生まれる場としての流域――現場から環境倫理を再考するために」,『現代文明学研究』No. 8: 421-46.

２５．富田涼都,2007,「「自然の設計」の思想－生物多様性を保全するしくみを「設計」するために－」『環境－設計の思想－』, 東信堂:181-212.

２６．鬼頭秀一「環境倫理における風土性の検討」『公共研究』３巻２号、２００６, ４７－６０。

２７．桑子敏雄「社会的合意形成と風土の問題」『公共研究』３巻２号, ２００６、１１４－１２２。

２８．桑子敏雄「日本の風土と農村空間の整備ーふるさとの見分け方」『農村と経済』７２巻６号、２００６, ２３－３４。

２９．桑子敏雄「環境政策の思想と社会的合意形成」『杭州師範学院学報』２８巻６号、２００６、２８－３０。

３０．福永真弓, 2006,「現場から環境倫理をたちあげるために――その戦略群について――」,『公共研究』3(2): 172-97.

〔学会発表〕（計１０件）

１．二宮咲子・鬼頭秀一「かかわりの視点」からの人文社会科学的湖沼評価」日本生態学会５６回大会、2009 年 3 月 19 日岩手県立大学。

２．Maruyama, Yasushi, Dynamic Relation between Man and Nature: Case Study of Wild Monkey in Japan, The Conference Preservation of Biocultural Diversity, May 2008 University of Natural Resources and Applied Life Sciences, Vienna, Austria.

３．Maruyama, Yasushi, Social Acceptance and Social Innovation in Wind Power Technology , 7th World Wind Energy Conference 2008 June 2008, St. Lawrence College, Kingston, Canada

４．KUWAKO, TOSHIO, Consensus Building Towards Integration of Values in Flood Control, Environment and Landscape, XXII World Congress of Philosophy, 2008.Aug.

５．桑子敏雄, 島谷幸宏, 吉武久美子「包括的ウェルネスの思想」.. 2008. Mar.第 4 回日本感性工学会春季大会、2008. Sep、福岡。

６．Mayumi FUKUNAGA, 2009, ‘What is “pragmatic”? : Beyond a philosophy for preservation or restoration of nature’, Applied Ethics : The 3rd International Conference in Sapporo, Hokkaido University,. Nov. 22. 2008.

７．Yoshinaga, Akihiro From Environmental Ethics to Public Philosophy of Environmental Conservation, 第三回応用倫理国際会議 2008 年 11 月 北海道大学

８．Akito Yasuda, The significance of sport hunting in conservation policy and impact on the livelihood of the local people: A case study of Be'noue' National Park, Cameroon , KWS/JSPS/the ministry of Education, Culture, Sport, Science and Technology, Japan, International Workshop Re-conceptualization of wildlife conservation: toward resonatable action for living people August 2008 Kenya, Nairobi

９．Kitoh, Shuichi, "Reexamination of the Values of Nature: Towards the Local and Universal Environmental Ethics", Rio de Janeiro International Environmental Forum

2007, 20 Sep ,2007, PUC-Rio, Rio de Janeiro , Brazil

１０. Setoguchi,Akihisa, 2007年7月26日 War and Biology: The Transformation of Entomological Research in Japan, 1918-1945, ISHPSSB 2007 Meeting, (University of Exeter, England).

〔図書〕（計５件）

１．鬼頭秀一・福永真弓（編）『環境倫理学』東京大学出版会、２００９年１０月。

２．丸山徳次・宮浦富保（編）『里山学のねらい－＜森のある大学＞から』（昭和堂、2009年3月刊）。

３．桑子敏雄，久野節二『都市・建築の感性デザイン工学』朝倉書店，２００８。

４．桑子敏雄，延藤安弘，片寄俊秀，島谷幸宏，合田博子，岡田真美子，吉村伸一『日本文化の空間学』東信堂、２００８。

５．松田裕之『なぜ生態系を守るのか？環境問題への科学的な処方箋』NTT 出版、２００８，212頁。

６．研究組織

(1)研究代表者
鬼頭　秀一（KITOH SHUICHI）
東京大学・大学院新領域創成科学研究科・教授
研究者番号：40169892

(2)研究分担者
丸山　康司(MARUYAMA YASUSHI)
東京大学・教養学部・准教授
研究者番号：20316334

佐藤　哲(SATOH TETSU)
長野大学環境・ツーリズム学部・教授
研究者番号：10422560

井上　有一(INOUE YUICHI)
京都精華大学・人文学部・教授
研究者番号：50203261

池田　啓(IKEDA HIROSHI)
兵庫県立大学・自然環境学研究所・教授
研究者番号：60322369

桑子　敏雄(KUWAKO TOSHIO)
東京工業大学・大学院社会理工学研究科・教授
研究者番号：30134422

丸山　徳次(MARUYAMA TOKUJI)
龍谷大学・文学部・教授
研究者番号：70140126

白水　士郎(SIROUZU SHIROU)
近畿大学・文芸学部・准教授
研究者番号：10319759

(3)連携研究者
森岡　正博(MORIOKA MASAHIRO)
大阪府立大学・人間社会学部・教授
研究者番号：80192780

蔵田　伸雄(KURATA NOBUO)
北海道大学・大学院文学研究科・准教授
研究者番号：50303714

松田　裕之(MATSUDA HIROYUKI)
横浜国立大学・大学院環境情報研究院・教授
研究者番号：70190478

瀬戸口　明久(SETOGUCHI AKIHISA)
大阪市立大学・大学院経済学研究科・准教授
研究者番号：90419672

立澤　史郎(TATSUZAWA SHIROU)
北海道大学･文学研究科･助教
研究者番号：00360876

福永　真弓(FUKUNAGA MAYUMI)
立教大学・社会学部・助教
研究者番号：70509207

(4)研究協力者
吉永　明弘(YOSHINAGA AKIHIRO)
千葉大学・人文社会科学研究科・フェロー
研究者番号：30466726

富田　涼都(TOMITA RYOUTO)
東京大学・総合文化研究科・特任研究員

安田　章人(YASUDA AKITO)
京都大学・大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程

二宮　咲子(NINOMIYA SAKIKO)
東京大学・大学院新領域創成科学研究科・博士課程